

川上哲治？

神戸芸術工科大学 学長
松村 秀一
Shuichi Matsumura

邸別生産

大学での講義を始めて四〇年近くになるが、最近、私の言わんとするところが学生の皆さんに伝わっているのかどうか、いささか不安になるとことがある。どうも、学生たちと私の間の記憶の重なり代が狭くなっているように感じるのだ。先日、一九八〇年代半ば以降の住宅メーカーにおいて急速に発展した「邸別生産」の話をしていた時に、そうした不安を覚えた。

一九八〇年代初頭までの住宅メーカーの工場では、壁パネルや屋根トラスといった部品を見込み生産し、注文が来たらストックされている部品を棚から引張り出してくる

レートなのかカーブなのかを見極めてから打てば確実にバットの芯で捉えられるということだ

この話を講義で紹介していつと不安になるのは、かつては日本人なら誰でも知っていたであろう川上哲治さんを、今の学生たちが知っているのだろうかということである。そこで、最近ある大学の大学院生向けの講義の折に聞いてみた。

「川上哲治を知っている人は手を挙げてください」

驚いたことに誰一人手を挙げなかった。理解しにくい事柄をわかりやすくするためのたとえ話自体が、更に説明に時間を要する歴史話になってしまふ、まさに本末転倒の事態である。

どうすれば良いのか。川上哲治にとつて代わる人物、今の学生が確実に知っている人物の話に変えれば良い。例えば、川上哲治とは七十歳以上違うのだが大谷翔平はどうだろう。

大谷翔平さんが「球は引付けて打て」を実践していることは有名である。ある記事によると、大リーグでの

という方式が採られていた。これに対して邸別生産というものは、注文が来てから、これは松村邸で使う壁パネルですよ、これは鈴木邸で使う屋根トラスですよという具合に生産する方式で、見込み生産から邸別生産への変化は大きなインパクトを伴っていた。

この変化の背景には、情報の伝達・処理技術の格段の進歩と、段

取り替えを必要としない工作機械やライン編成の革新があったのだが、結果として、ある住宅メーカーでは、一九七〇年代に高々数千種類しか生産していなかった部品の種類が、邸別生産方式が定着した一九九〇年代半ばには数百万種類にまで増大していた。驚くべき変化であり、この技術変化が現代の住宅生産にも直接影響している。

球は引付けて打て

その住宅メーカーの方の話というのは次のようなものだった。

「打撃の神様、川上哲治さんが仰ったように『球は引付けて打て』です。注文主からは最後の最後まで変更希望が出てきます。それがスト

ないことが頻繁にあったとしても何の不思議もない。もちろん、片方の人の記憶にあるのに、もう片方の人の記憶に全くないという事柄も多いだろう。

年齢差が開けば記憶の重なり代は狭くなる。生きてきた国や地域が違っても記憶の重なり代は狭くなる。その人たちと一緒に働く、或いは遊ぶうえで、川上哲治を大谷翔平に置き換えることのように、記憶と記憶の間の関係づくりの工夫が必須である。

近年の建設業界で、もう何十年も前に聞いたのとさして変わらない議論が繰り返されていたり、もう何十年も前に取り組まれたのと同じような技術開発が行われたりするのを見ることもある。組織のなかの記憶の伝承もまた、記憶間の関係づくりの一つである。

その内、大谷翔平の記憶すら持たない世代が現れる。いくら記憶媒体が進歩しても、自らの記憶のなかで生きる精神のあり様は変わることがなく、記憶間の関係づくりの重要性もまた不変である。



早い時期の邸別生産を象徴する写真。1986年頃の撮影と思われる
(写真提供：積水ハウス株)

記憶間の関係づくり

身体は常に今という時空間を生

コンタクトポイント(球にバットが当たる位置)の平均は、ホームベースより約六センチ前だが、今シーズンの大谷さんのポイントはそれより約一五センチも後ろだという。驚くほど「引付けて打」っているのだ。次の講義からは、川上哲治さんを大谷翔平さんに代えた話にしてみようと思う。

きている。それに対して人の精神は多くの場合、記憶のなかで生きている。例えば、「神田の蕎麦屋〇〇」と言った場合、自分が行った記憶、食べた記憶、或いは調べた記憶でしか認識できない。それは今この瞬間の「神田の蕎麦屋〇〇」ではない。そして、人と人がある事柄について話をする場合、特に具体的な人や場所については、それぞれの記憶に基づいている。それぞれに記憶している時代が違っていて、話が噛み合わ